

第5回東アジア地区バレーボール選手権大会 (The 5th AVC Eastern Zonal Volleyball championships) に帯同して

橋本 吉登*

はじめに

2006年7月12日～7月16日に台湾、屏東市で開催された第5回東アジア地区バレーボール選手権大会(The 5th AVC Eastern Zonal Volleyball championships)に帯同ドクターとして参加した。大会は参加国が少なく男女が同会場で行う小規模の大会であり、JVAから派遣されたドクターは一名であった。年齢区分では男子がジュニアチームであり、女子がユニバシアードチームであった。しかし、この年齢区分は各国によって異なり、シニアクラスのチームが参加している国もあった。

開催地台湾屏東について

開催地の台湾の屏東県(へいとうけん, Pingtung County)は、台湾最南端の県である。県庁所在地である屏東市は国際空港のある高雄(カオシュン)との県境にあるために南端よりやや西北に位置する。日本からは約3時間半のフライトで台湾南部の高雄空港に到着した。空港から屏東市まではバスによる移動であった。日本に近接するアジアの国であり、空路、陸路ともに移動時間は大きなものではなく、移動にともなうコンディションの不安は少なかった。市の中心部より少し外れると田園地帯の道の両脇に木造平屋の家が並び建ち、一時代前の日本を思わせる風景であった。町の中心部には二階建て、三階建ての建物もみられたが、建物の間口はさほど大きなものではなく、町全体が窮屈な印象を受けた。商店には漢字で書かれた縦長の大きな看板が立ち並んでいた。職業柄、医療関係の建物に目が向いたが「洗腎中心」という物珍しい看板があった。日本語に訳せばさしずめ「人工透析センター」であろうか。行き帰りの道に葵のご紋に「徳川家康」とだけ記された大きな看板があったが、これは最後まで何を意味しているかわからなかった。大雨にたたられたこともあり、風景をバスから追うのみで街中の散策は出来なかった。

天 候

台湾入りをした当日と翌日は晴天の亜熱帯独特の高温多湿の天候であった。実感したのは高温以上に高湿度の方で、湿気の高い宿舎の屋内では洗濯も乾かないために寮内の学

生用の洗濯乾燥機を選手はフル回転で利用していた。このまま暑い日が続くと思われたが、翌日より台風の接近による暴風雨に見舞われた。これも台湾の天気のもう一つの顔である。連日、大学構内の大きな水たまりをよけながら、別棟にある食堂に通う毎日であった。直撃した台風のために市中が床上浸水となった日もあり、濁流の川と化した道路上では自動車の走行に大きな支障が出た。大会三日目では体育館から宿舎への帰りのバスが浸水のために故障し、道路上で立ち往生したために、各チームの選手は宿舎へのピストン輸送となり、最も試合の遅かった日本チームは冷房と照明が消えた試合会場で数時間の足止めを食った。

宿泊施設

今回の参加チームの宿泊は国立屏東科技大学の敷地内にある学生寮であった。同大学は帰国後に調べてみると前身が農業専門学校であった。このために構内に馬場もあり、工学系というよりは生物系の雰囲気を持つ施設であった。寮の部屋は4人定員の部屋で12畳ほどの大きさであった。室内は清掃が行き届いており、鼻につくような異国の匂いもなかった。部屋の四隅には天井にベッドが置かれた日本では子供部屋に置くような机が置かれていた。ベッドの大きさは男子の長身選手でもなんとか体が収まる大きさであったが、寝相の悪い筆者は転落を恐れて、もっぱら床で臥床した。台湾入りして二日間はマットや毛布といった寝具が届いておらず、文字通り硬い床に直接寝ることとなった。エアコンについては十分に稼働して快適であった。またシャワーも各部屋に完備していた。部屋には電話がなかったが、電話は構内に「出張公衆電話車」と言うべき公衆電話を数台置いたワゴン車があり、学生はその電話から電話をかけるようになっていた。日本同様、携帯電話が普及している台湾では公衆電話の需要はそれほど高いものではないようである。工学系の大学であり、各部屋には有線LANが引かれていた。LANジャックの近くに「電網…」と書かれたメモにあるアドレスを手がかりにしてパソコンの設定を調整することでインターネットに接続することが出来た。このインターネットを通じて、毎日試合後にJVAへ男女の試合結果を報告することが可能であった。遠征先でインターネットが使えることは日本へのメールのやり取りが出来たり、調べ物ができたりで重宝である。大きなプロバイダーでは海外での接続サービスをしていて、現地の市内通話でインターネットが使える所も多く、日本で事前に情報を収集しておくに役に立つ。

*横浜掖済会病院 整形外科

食 事

飲料水は支給されたミネラルウォーターを練習時も含めて使い、水道からの生水は飲まないように選手とスタッフに徹底した。ミネラルウォーターは練習においても十分に手に入った。ヨーロッパに多いカルシウムやマグネシウムが多量に含まれるいわゆる「硬水」のミネラルウォーターによる消化器症状はみられなかった。食事は三食ともに大学の敷地内にあった学生食堂で出される選手用の食事であり、出てくる料理も地元の台湾風の味付けの料理が殆どであった。肉料理は鶏肉や羊肉が中心であり、味も比較的日本人の口に合うものであると個人的には思った。選手の中にはこの料理ですら口に合わず日本より持ってきたカップ麺を食べていた選手もいた。今回は短期間の滞在であったのでそれでも何とか凌げたがこの料理で手が出ないようであれば台湾以外のアジア諸国や中東の遠征でまともな食事が出来るか心配である。「食べることも練習の内」という食事や栄養への意識を高める選手教育が必要であろう。大学の構内には小さなコンビニエンスストア（セブンイレブン）があり、カップ麺やレンジ用の弁当、おにぎり（台湾風）なども販売されていて、必要があれば買うことが出来た。試合が長引き、食堂の開店時間に間に合わない時などに利用した。

医 療 活 動

今回は男女両チームに対してのチームドクターであったが、ベンチ登録は男子チームだけであり、男子の試合はベンチに入り、女子の試合ではベンチの裏について試合に臨んだ。幸いに宿舎は男女同一であり、女子選手のコンディションについてはトレーナーからの情報で知ることが出来た。参加チームの少ない今回の大会は休息日のない短期日程であった。期間が長期に渡る大会では疲れ、寝冷え、食欲の低下から来る風邪や下痢などの内科的な症状が問題となるが、短期では外傷などが問題となると予想された。

女子選手は中心選手のライトプレーヤーが初日の中国選で足関節捻挫をした。精神的な支柱となる選手であり、チーム側もぜひ、今大会の山場となる台湾戦で使いたいという意向があった。翌日の練習と試合は完全に休ませて受傷二日後の台湾戦はテーピングと消炎鎮痛剤の投与で出場させた。結局、思うような動きは叶わず、第一セットの前半で交代となった。試合の出場はギリギリで可能と思われたが、残念ながら回復に至らず、間に合わなかった。

男子の選手では大きな外傷の選手はいなかったが、高校生エースの一人が下肢痙攣で最終戦の韓国戦で途中退場した。この試合はフルセットとなったが、同選手は第4セットの後半より足を気にする仕種が見られていた。熱戦のために勝負所で上がるトスの本数も多く、短時間に消耗した

と考えられる。下肢の痙攣の原因に関しては様々な要因が述べられているが、原因の特定には未だ至ってはいない。このため、完全に予防することは困難である。今回のケースも蒸し暑い会場で大量の汗をかいた後での痙攣であった。短時間で体内の電解質が体外に出てしまい、電解質の予備量が減少したと考えられる。電解質の多めの補給を促すなどの対策が必要であったと思われる。

観 戦 記

男子チームは試合外の練習にも帯同したが、大会前の選手一人一人の動きが良く、チーム全体が好調であり、期待を持たせるチームであった。男子の対戦相手と結果を試合順で書くと日本×香港 (3-0)、日本×台湾 (3-1)、日本×中国 (3-0)、日本×マカオ (3-0)、日本×韓国 (3-2) であり、日本男子チームは5戦全勝で見事に優勝を収めた。

今回の大会のポイントは地元台湾と韓国チームであった。台湾は地元開催であり、優勝を期してナショナルチームが出場した。2メートル級の二人のセンターがポイントゲッターであったが、サイドは高さがあまりなく、軟打やコースを限定した打ち方であり、ややバランスに欠くチームと言えた。地元台湾の応援で体育館は満員となり、日本のサーブ時にはブーイングも起きて完全なアウェイゲームであった。日本のサーブや攻撃が少しでも甘くなるとたちまち速攻でポイントを取られる気の抜けない展開であった。2-1で迎えた第4セットは「取ったら、取り返す」というがっぶり四つの展開。地元の応援が逆にプレッシャーになったのかミスが目立つ台湾に対して、少々ミスがあっても建て直してはサービスエースを決め、スパイクを打ち続け、30点を超えるジュースの末、ついに勝利を勝ちとった。

最終日の対戦相手の韓国戦はサイドアタッカーの身長はさほど高く無いものの思い切り助走距離を取ったオープントスが主体であった。試合前のミーティングではブロックを中心に注意があった。この試合は第四セットの後半に両下肢の痙攣により、高校生エースの一人を欠く、苦しい展開であったが、日本の気迫が韓国を完全に上回って、前日よりやや不調であったキャプテンも調子を取り戻し、痙攣でベンチに下がった高校生エースに交替した選手も強烈なサービスエースを決めるなど活躍。食い下がる韓国を下し、見事、優勝をおさめた。

女子チームの試合は日本×中国 (3-2)、日本×マカオ (3-0)、日本×台湾 (0-3)、日本×香港 (3-0)。女子は台湾に一敗をして総合第二位の成績であった。苦戦した緒戦の中国チームは上海の大学チームで185センチ級の選手が沢山いた。日本は緒戦もあり、硬くなり、サイドアタッカーの攻撃が決まらなかったこととフェイントが拾えなかったことがセットを落とした原因である。しかし、センターの攻撃は序盤より好調でポイントを稼いでいた。試合の後半

には修正ができ、前半拾えなかったフェイントを拾い、速攻につなげられるようになった。また、相手の強打もコースを読んだりベロがよく拾い、復調してきたサイドアタッカーに二段トスを打たせる展開となり最終セットをものとした。

唯一負けたのが、地元台湾戦であった。メンバーは前年のユニバシアード大会優勝時のメンバーでほぼ固めていた。日本は捻挫で欠いていたライトの選手を先発出場させて、試合に臨んだ。第一セットは16点まではシーソーゲームの接戦であったが、その後抜け出し台湾が取った。日本は満足にスパイクが打てないライトの選手を第一セットの序盤で交替。二セット、三セットも交替選手が上手く機能しなかった。一方の台湾チームはレシーブの粘りが素晴らしく、日本の強打もフェイントも良く拾って高い攻撃につなぐ、レシーブと攻撃が見事に連携した攻撃パターンで攻めていた。結果的に0-3の完敗であった。非常にまとまりの良い台湾チームを観ながら「もし、このチームが全日本シニアチームと対戦したらどうなるのだろうか？」と漠然と思っていたが、そのおよそ4カ月後に日本で行われた世界バレーで全日本女子シニアと台湾女子の対戦が実現し、全日本女子シニアチームは台湾チームに敗れた。

余 談

大雨でバス故障の日に会場でバスを待つ間に団長さんから思い出話を伺った。30年前に大学チーム(単独チーム)が台湾に招待されて親善試合をおこなった。この時は台湾のテレビで初めてバレーボール中継が行われ、今回の試合会場となった屏東県立体育館が6000人の観客で埋まったという。大学チームはその頃まだ相当に実力差があった台湾のナショナルチームを簡単に4試合連破して、帰国の途につこうとしたところ、台湾のバレーボール協会から「帰国を延期してもう一試合やってほしい」という依頼があったという。依頼のあった夜、選手一人一人の部屋に台湾協会の人が出てきては盛り場に連れ出した。翌日の試合は二日酔いでバレーボールどころではなかった選手達は台湾チームに負けてしまった。次の日も日本への帰路で台北に向かった大学チームに「もう一日だけ試合をしてほしい」という協会からの願いがあり、前日と同様に酒席攻撃もあり、試合は完敗。二日間台湾チームに負けて、ようやく『許してもらって』帰国したという。台湾の協会は何とかバレーボール人気を国内で高めようと必死で、テレビ放送で台湾チームが勝つ雄姿を国民に見せてバレーボールブームを作りたかったのであろう。現在の日本のバレーボール中継が応援団にアイドル歌手を起用し、無理やりブームを作ろうとしている姿は30年前の台湾協会の行動を決して笑うことは出来ない。